

# 平成 27 年度「全国学力・学習状況調査」の結果及び分析、今後の取り組みについて

対象学年 第 6 学年 実施児童 98 名  
 実施日 平成 27 年 4 月 21 日  
 対象教科 国語 A 国語 B 算数 A 算数 B 理科

## 【結果】

国語 A	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江戸川区立一之江小学校	95	9.8/14	69.8
東京都(公立)	90,409	10.1/14	72.3
全国(公立)	1,061,264	9.8/14	70.0

国語 B	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江戸川区立一之江小学校	95	5.4/9	60.2
東京都(公立)	90,405	6.0/9	66.5
全国(公立)	1,061,093	5.9/10	65.4

算数 A	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江戸川区立一之江小学校	95	11.6/16	72.5
東京都(公立)	90,417	12.4/16	77.4
全国(公立)	1,061,301	12.0/16	75.2

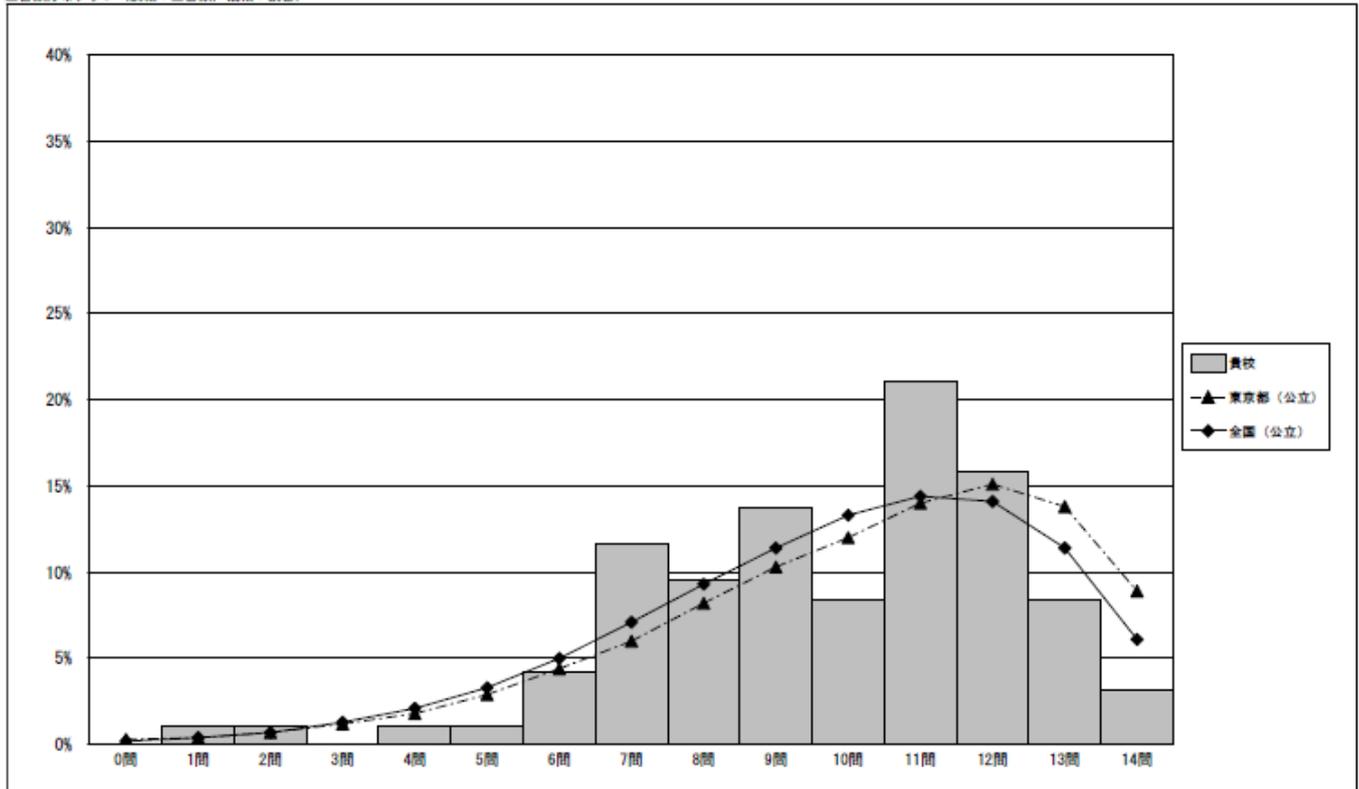
算数 B	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江戸川区立一之江小学校	95	5.6/13	43.2
東京都(公立)	90,436	6.2/13	47.8
全国(公立)	1,061,063	5.9/13	45.0

理科	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江戸川区立一之江小学校	95	13.5/24	56.3
東京都(公立)	90,433	15.0/24	62.4
全国(公立)	1,060,792	14.6/24	60.8

【正答率分布グラフ】

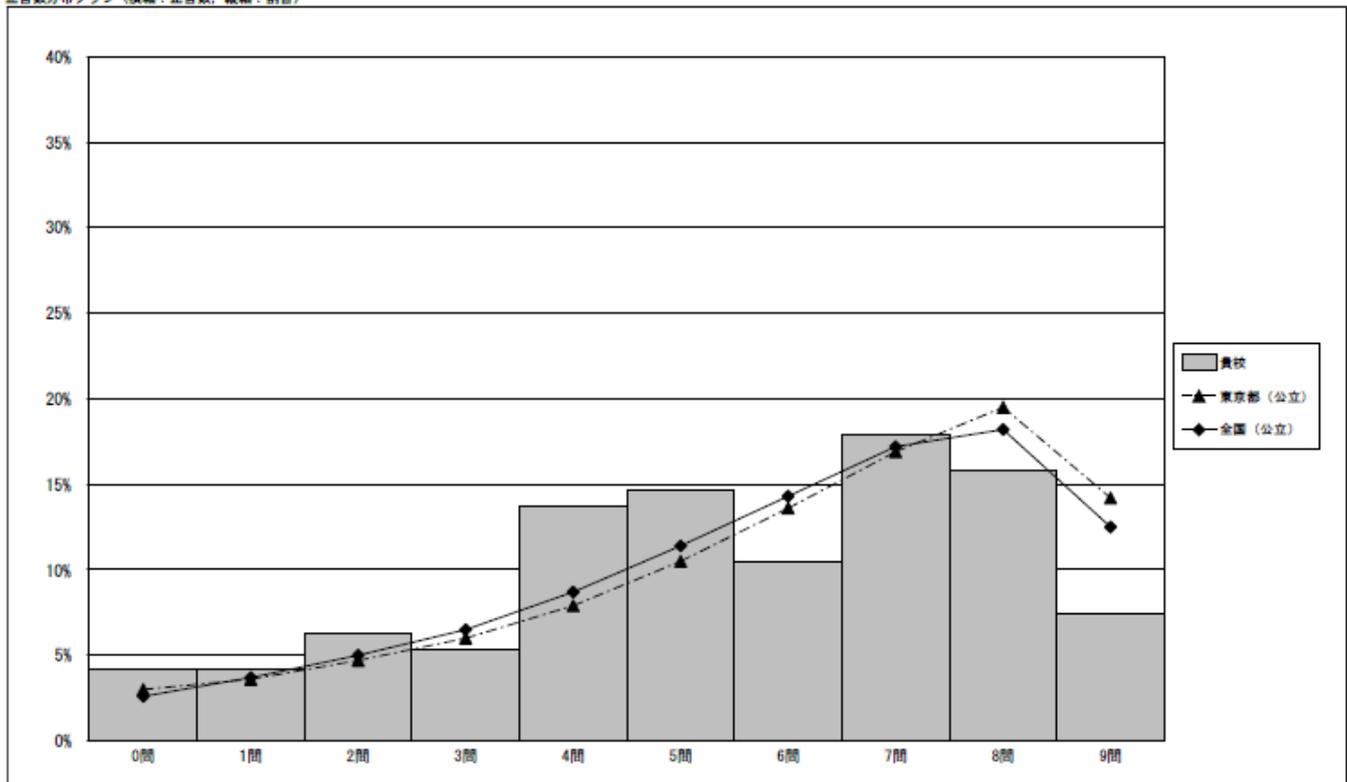
国語 A

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



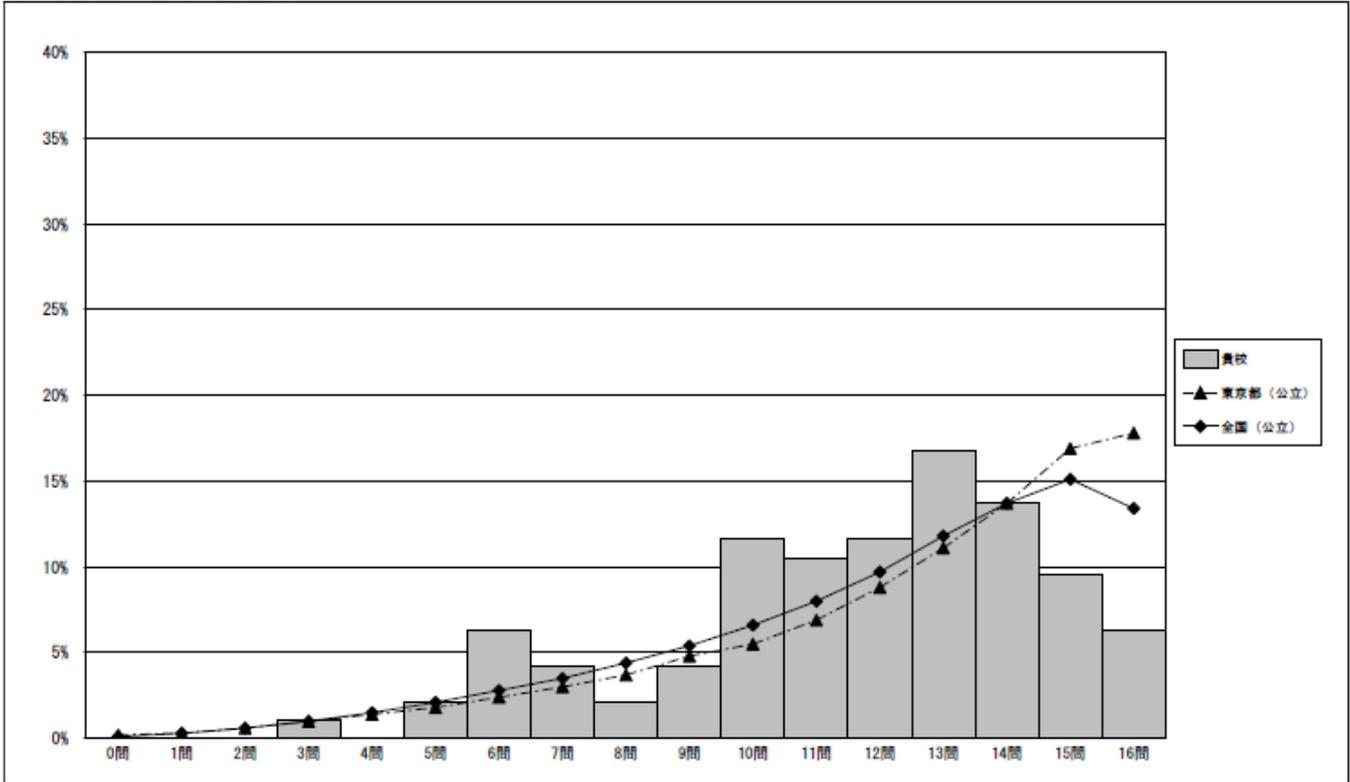
国語 B

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



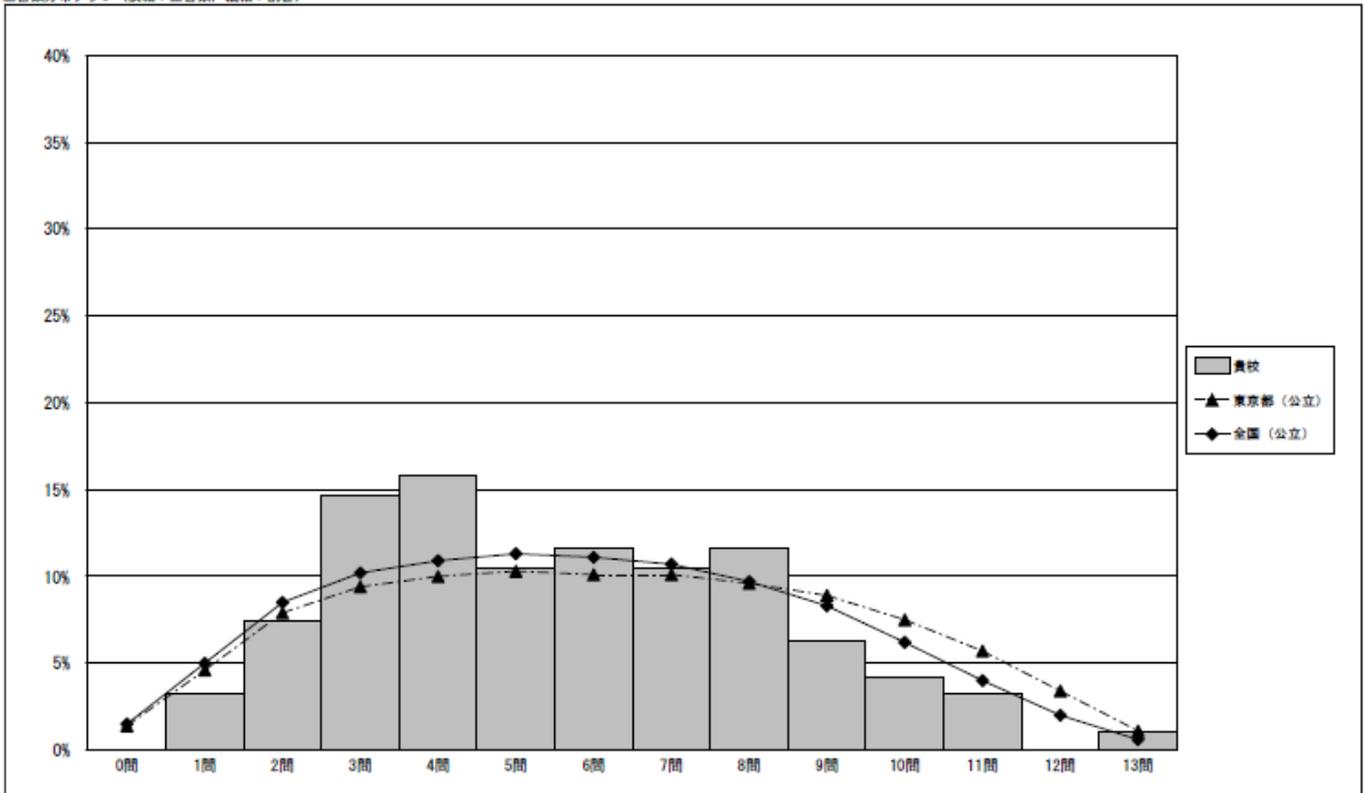
# 算数 A

正答数分布グラフ (横軸：正答数、縦軸：割合)



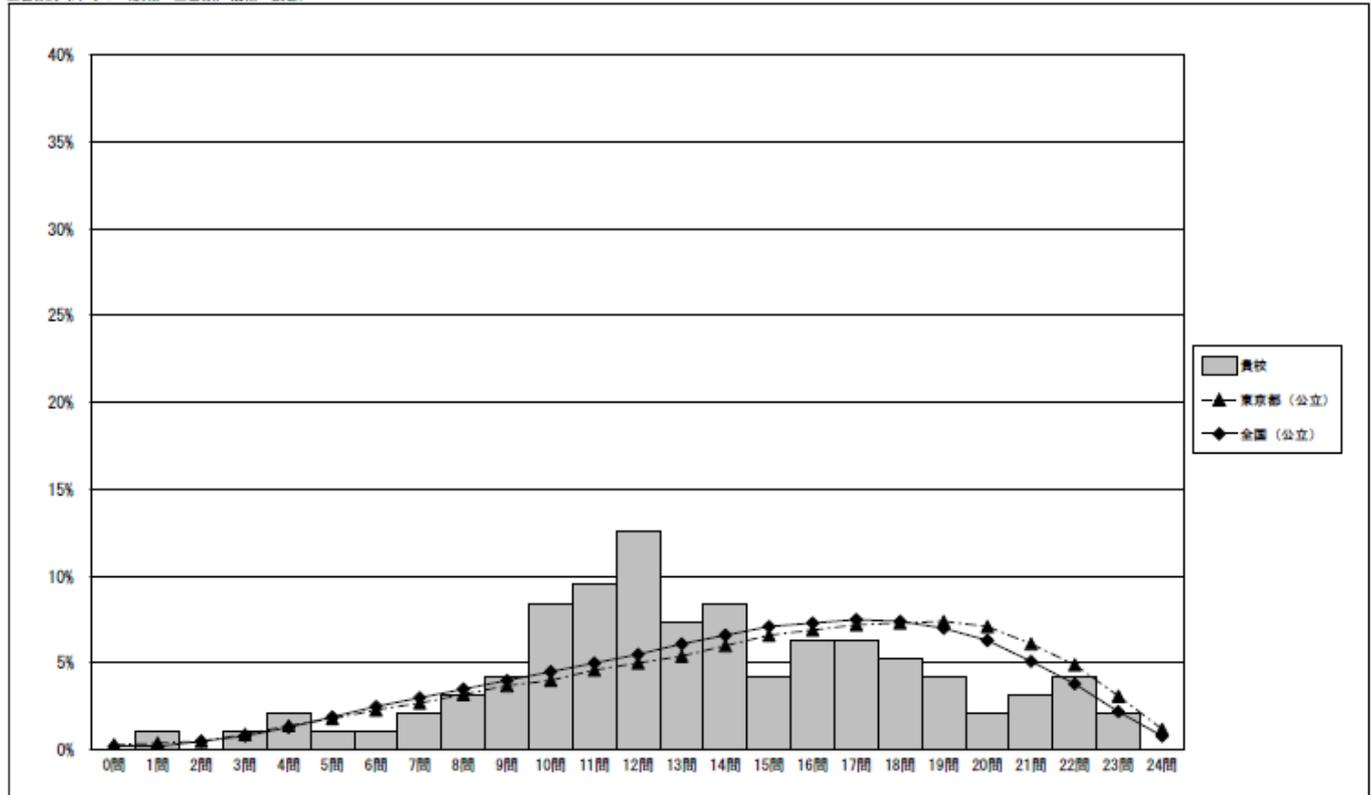
# 算数 B

正答数分布グラフ (横軸：正答数、縦軸：割合)



# 理科

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



## 【分析】

### ○国語

・「国語A：主として知識」に関する問題では、全国平均正答率との差が-0.2%でした。昨年の-2.8%と比べて2.6%の向上が見られました。「国語B：主として活用」に関する問題では、全国平均正答率との差が-5.2%でした。こちらは昨年と比べて1.3%下回る結果となりました。

・「言語文化や国語の特質」については、全国平均を上回りました。漢字の読み書きや言葉の意味・使い方など、既習学習が定着してきていることがわかります。

・反面、「読むこと」では、Aで-2.3%、Bで-3.7%、「話すこと・聞くこと」で-3.5%と全国平均を下回りました。初めて読む長文の内容を正確に捉えきれず、正しい選択肢を選べていない児童が多く見られました。ただ無答率は低く、問題に一生懸命取り組んでいる様子が伺えます。

・「書くこと」については、Aで-0.7%と一定の力が身に付いていることがわかります。しかしBでは-7.9%と大きく落ち込む結果となりました。「目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら記事を書く」問題など、一定の条件下で文章化する問題では、考えを明確にできなかったりうまく文章に表せなかったりする解答が多く見られました。また、筆者の言葉を引用することが不得意であることもわかりました。

・全体として、知識面では一定の成果が見られたものの、活用面での向上を図る必要があることがわかりました。

## ○算数

・「算数A：主として知識」に関する問題では、全国平均正答率との差が-2.7%でした。昨年の-6.4%と比べて3.7%の向上が見られました。「算数B：主として活用」に関する問題では、全国平均正答率との差が-1.8%でした。昨年の-5.8%と比べて4%の向上が見られました。

・各観点で全国平均を1~3%程度下回ってはいるものの、ほぼ全ての観点で昨年よりも向上が見られます。昨年の課題であった四則計算や計算のきまりを用いた問題も正答率が上がりました。

・Aでは成績中間層が多いことがわかりました。上位層は多くないものの、下位層がとて少なく、少人数指導を通じて全ての児童に基礎的・基本的な力が備わっていることがわかります。

・全体として、知識面も活用面も向上してきています。現在の取り組みを継続しながら、より一層のレベルアップを図っていきたいと思います。

## ○理科

・3年ぶりに実施された理科の学習状況調査では、全国平均正答率との差が-4.5%ありました。内訳として「知識に関する問題」が-2.9%、「活用に関する問題」が-5.4%の開きがあります。

・正答数分布を見ると、全24問中15問以上を正答した児童の割合が全国平均を下回り、逆に14問以下（特に10~13問）を正答した児童の割合が全国平均を大幅に上回っています。このことから、既習内容が十分に身に付いておらず、理科を苦手としている児童が非常に多いことがわかります。

・設問別に見ると、「電磁石と磁石の同極が退け合う性質を振り子が左右に等しく振れる仕組みに適用できる」ことを問う問題、「水の温まり方を考察するために、実験結果を基に自分の考えを改善できる」かを問う問題、「方位を判断するために、観察した事実と関係付けながら情報を考察して分析できる」かを問う問題など、学んだことをもとに他の事象と関連付けることが十分にできていないことがわかりました。

